



子育てを応援します

# ぐんぐんすくすく! 相生っ子!

住所 相生市緑ヶ丘4丁目5-5

電話 0791-23-5070

FAX 0791-22-7211

E-mail ikusei-aioi@nifty.com



## ◆兵庫県青少年非行対策等連絡会議 <2026.4.24> より

### 兵庫県警生活安全部少年課報告より

#### 1 少年非行の概況(令和7年中)

	令和7年	前年比
非行少年	2,927人	+584人
不良行為少年	15,724人	-39人

#### (刑法犯少年の学識別)

	令和7年	前年比
未就学児	3人	+3人
小学生	516人	+150人
中学生	844人	+251人
高校生	599人	+71人
その他学生	90人	+6人
有職少年	246人	+30人
無職少年	115人	+22人

#### 2 不良行為少年

	令和7年	前年比
粗暴行為等	61人	+2人
深夜はいかい	3,684人	-769人
家出	53人	-18人
怠学	84人	-38人
不健全性的行為等	20人	+13人
飲酒	539人	-7人
喫煙	10,064人	+518人
薬物乱用	4人	0人
その他	1,215人	+260人

学識別では、前年に比べて小・中学生の増加が見える。  
特に、小学6年、中学1年の増加が顕著だそうです。

## ◆神戸新聞「正平調」で双葉中学校の名前を見つけました。

### 「当たり前前の幸せとは」

神戸新聞『正平調』より

加古川の古刹、鶴林寺の境内には、多くの伽藍とともに、特攻隊員の忠魂碑がある。1959年に旧中村家旅館に建立された碑は、宿の廃業に伴って2001年に鶴林寺に移された。◆太平洋戦争中、中村家は軍の指定旅館となった。加古川飛行場が、関東・中部方面から鹿児島・知覧飛行場に向かう特攻隊員の中継地になったことで、若者たちは出撃前にここで遺書をしたためた。◆非業の死が語られる特攻隊員だが、フィクションでは恋愛を扱った物語もある。「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」は、鹿児島出身の作家がかつて、社会科見学で知覧特攻平和会館を訪れた際の衝撃が下地となった。◆戦時中にタイムスリップした女子中学生が隊員と出会う。2人の距離が縮まり恋心が芽生えていく甘美さがつづられる一方、空襲の惨劇や出撃を控えた隊員の葛藤も生々しく描かれる。◆相生市の双葉中であつた本の帯を作る授業で、2年生の約120人のうち5人が本作を選んだ。ヒロインが心を寄せた隊員の不条理な死を踏まえ、ある生徒は「当たり前前の幸せとは」と帯に記し、問いかけた。◆世界にはいままも戦火を交え、当たり前前の幸せがいとも簡単に奪われる国がある。中学生の素朴な問いに、戦争指導者はどう答えるだろうか。

(2026・4・5)

返事ができる子は伸びる。

返事は心の向きを表す。

挑もう、学ぼう、伸びていこう。

こう思っている子の返事は早い。

こう思っている子の返事は  
気持ちがいい。

こう思っている子の返事は力強い。

返事は心の向きを表す。

できない、不安だ、ぼくなんて…。

こう思っている子の返事は遅い。

こう思っている子の返事は重々しい。

こう思っている子の返事は弱々しい。

返事ができる子は伸びる。

できる、できないを考えるとなく。

「はい」と返事をする。

それだけで子どもたちは伸びていく。

返事は自分を縛る「我を捨てる」練習。

**Question** 最近、娘が「お父さんはきしょい」などと、心を傷つけるような言葉を返してきます。

**Answer** 思春期の子どもは、女子は女性としての自分、男子は男性としての自分を意識するようになります。娘さんは今、大人の女性へと成長して行く途中で、お父さんを異性として意識するようになり、少し戸惑っているだけです。もうしばらくの辛抱です。優しく見守りましょう。

思春期の子どもは、小学校時代には意識しなかった性の部分を強く意識します。女子は、父親を男性として意識し、自分は女性であると意識するようになります。しかし、まだ子どもですので、男性としての父親とどのように関わればよいのかがわかりません。

自分とは異質なものとして、拒否するような傾向があります。極端な場合には、「お父さんの後にお風呂に入るのは絶対にイヤ」などということも少なくありません。しかし、このような行動は、成長して女性としての自分が完成していくにつれてなくなります。

**Column** 大切なコミュニケーション

娘さんは、自分でも父親にひどいことを言っていると気づいているのですが、今はそういう言葉しか見つからないのです。たとえきつい言葉でも、娘が父親に対してコミュニケーションをとっていると考えることができます。しかし「きしょい」「きもい」「うざい」などは、相手の人格を否定する言葉であるということは、きちんと話しておきましょう。

ココロが“ほろり”  
とする感動物語

返事は大きな声で「ハイ！」

梅村清春さん

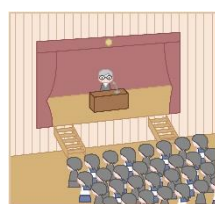
豊田市の水野知美さんが郵便配達しているときに、向こうから歩いてきた女子中学生に「こんにちば」「頑張ってください」と声をかけられ元気をもらったという話を紹介した。そして、その子の通う藤岡中学の校長先生への「これからもこういう生徒が増えるといいですね。私も見習います」という言葉を添えて。

すると、4月1日付で、小原から藤岡中学に異動になった校長の梅村清春さんから小欄に便りが届いた。こんな内容だ。「藤岡中学は豊田市内でも一番生徒数の多い学校です。重責をひしひしと感じていた直後のことでした。藤岡中学の女子生徒のあいさつのお話にも心温まる思いがするとともに、そんな素晴らしい学校へ赴任できることが楽しみになりました」

梅村さんは前任の小原中学で「名前を呼ばれたら、大きな声で返事をしよう」と呼びかけていた。それには、まずは校長自身がお手本を示すべきだと考えた。体育館での全校生徒の朝礼の際に、司会の先生から「今から校長先生にお話しさせていただきます」と紹介される。すると間髪入れず「ハイ！」と返事をするのだとい

う。周りも驚くほどの大声で。それは、他校へ招かれてスピーチをするときも同じ。それをまねて、先生方も見習うようになる。さらには生徒も返事ができるようになる。

「藤岡中学でも、だれもが声を出して返事やあいさつができて、心が通じ合えるような場にするのが目標です。地域の皆さんの期待に応えられるようおっしゃった。」



「著者からのメッセージ」  
ハイ！そうです。校長先生は教育のプロです。親は子の背中を見て育つ。先生も同じなのです。

「松下の独り言」  
この「返事」の習慣は、市内のある中学校では十数年前から、全校で、もちろん教師もが普通にやっている学校があります。他の中学校にも広がっているはずだがなあ・・・